

さまざまな迷路

星 新一



新潮文庫

ささまざまな迷路^{めいろ}

新潮文庫

ほ-4-27



昭和五十八年八月二十五日
昭和六十年六月五日
発行

著者 星^{ほし} 新^{しん} 一^{いち}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三三二六六一五一)
編集部(〇三三二六六一五四〇)
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社
© Shin'ichi Hoshi 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-109827-1 C0193

新 潮 文 庫

さまざまな迷路

星 新 一 著



新 潮 社 版

3007

目

次

全快	九
町人たち	二
使者	三
重要な任務	五
森の家	三〇
ことのおこり	三六
再現	四二
しあわせな王女	四三
ホンを求めて	五
街	七
因果	七四

小鬼	七六
過渡期の混乱	八
しあわせなやつ	一〇三
顔	一〇五
目撃者	一三四
コーポレーション・ランド	一三〇
判定	一四六
末路	一四八
ベターハーフ	一六三
小さな記事	一六八
みつけたもの	一七六

出口	一七六
名画の価値	一九三
三段式	一九四
かたきうち	一九七
骨	二〇七

すてきなかたねえ	三六
一軒の家	三九
買取に応じます	四一
発火点	四三
やつら	五九

解説 和田 誠
カ ッ ト 真 鍋 博

さまざまな迷路

全 快

「このあいだから、なぜということもなく、自分に借金があるような気がしてならないのです。先生、どういうことでしょう」

ひとりの青年が病院へやってきて言った。神経科の医師はカルテを見ながらうなずく。

「借金がですか……」

「ぼくはこの一年のあいだに、新進の作曲家としての地位をきずいた。ヒット曲もいくつか作った。才能にめぐまれ、ガールフレンドにも不自由しない。それなのに、なぜこんな不景気な気分にとらわれるのか……」

「不景気な気分ですか。なるほど、そんな傾向がでてきましたか。よろしい、できうる限りの手当をして、かならず治療してさしあげます。さあ、そのベッドに横に……」

青年は横たわり、治療が進められた。だが、青年は叫ぶ。

「なんだか、変ですよ。借金のことが、ますます頭のなかで鮮明になってきます。一方、音楽へのインスピレーションが、ぴたりととまってしまった。ガールフレンドたちの名も顔も忘れてゆく……」

「それでいいですよ。あなたは一年前に、道でころんで頭をうち、記憶喪失になっていたのです。やっと正しい記憶がとり戻せたというわけです。治療のしがいがあった。おめでとうございます。うれしいでしょう」

青年は完全に過去の記憶をとり戻した。借金の山と、不美人の妻と、会社の金をつかいこんで逃げている身である自分のことを。

町 人 たち

「あなた、聞きましたか。浅野内匠頭あきのたくみのかみが殿中で吉良上野介きらこうずけのすけに切りかかり、やりそなつて切腹を命ぜられたとか……」

「聞いたとも。面白くなりそうですね。なるといい。かたき討ちに発展すべきだ」

「集団でのかたき討ちは、法で禁止ですよ」

「法なんか、なんです。おれたちは娯楽にうえてるんだ。おれたちはいつも武士にぺこぺこしている。その代償に、武士はあつということをやつて見せてくれるべきです」

「そば屋さん。あんた商売へたですねえ。きつと赤穂の浪士でしょう。ほら、どきまぎした。かくさなくてもいいですよ。われわれはみな支持者です。期待しますよ。がんばって下さい。そうだ、わたしの知合いに、吉良家に出入りの商人がいます。こんど情報をもらつてきてあげますよ」

「うちには吉良邸の図面があつたはずだ。お貸ししますよ。派手におやんなさい。想像するだけでも、ぞくぞくするなあ」

「ぐずぐずしていると、吉良老人が死んじゃいますよ」

「とうとうやりましたなあ。胸がすつとしました。浪士たちはみな切腹だそうですね」

「法をおかしたのだから仕方ないでしょう。いさぎよいところがいいし、ひと区切りもつく。生きてられて威張られちゃかなわん」

「また、なんか起つてほしいですな……」

使 者

一台の円盤状の物体が飛来し、地球上に着陸する。人びとの見まもるなかでドアが開き、宇宙人がひとり、にこやかな表情と動作で出てくる。外見は地球人と似ている。みな緊張がほける。

使 者 だが、つぎの瞬間、予想もしなかったことが起る。円盤が爆発し、宇宙人のからだは四散。もちろん即死。青ざめる関係者たち。

使 者 「なんとということだ。この宇宙人の星のやつらは、事故だと信じてはくれまい。連絡の途絶で、われわれにやられたと判断するだろう。そして、地球を野蛮な星と思い……」

使 者 こうなつたからには、対策はただひとつ。なかつたことにする以外ない。宇宙人なんか来なかつたのだ。だれも円盤など見なかつたのだ。爆発などなかつたのだ。

使 者 あたり一帯が徹底的に調査され、破片がひとつ残さずしまつされ、放射能は中和され、事件のあとは完全に消される。さらに報道管制。このことが一般に知れたら、社会不安で大混乱が発生するだろう。

13 問題は目撃者たち。みな神経科の病院へと隔離される。暗示療法。あれは悪夢だったのだ、

あなたの狂気の幻影だ、忘れるのです。そして、正常にもどりなさい。忘れるのです。

やがては最高責任者さえも、あれは幻覚だったという気分になってくる。

すべてが忘却のかたに去ったところ、一台の円盤が飛来し着陸し、にこやかな宇宙人が出てきたとたん、それが爆発する……。

重要な任務

昼ちかく、ベッドで眠っていると、電話のベルが鳴った。受話器を耳に当てると、相手の声が言った。

「もしもし、聞こえますか」

おれは答えた。

「ちつとも聞こえねえな」

「それはいいけません。すぐ耳の医者に行くべきです。一時間以内にどうぞ」

「わかったよ。そうするよ」

おれは起きあがる。頭のおかしい者どうしの会話ではない。これは合言葉であり、暗号なのだ。すなわち、一時間以内に本部へ出頭しろとの、上からの指令なのだ。

おれの属している「組織」は、公然たる存在ではないが、世界のあらゆるところまで根をはる強力なものだ。隠然たる勢力というやつだ。これの一員になりたがるやつは多い。おれだってそうだった。

おれも加入できた時は、うれしく得意だった。他人に自慢するわけにはいかなかったが、大舟